

## THE collected works of LYDIA SICHER 資料

## 12 Introduction

(資料 1)

3 Though Adler referred to the pattern and the law of movement, the term “pattern of life” does not appear in the literature of individual Psychology as distinct concept from the style of life. This distinction can be inferred, however in some of Adler’s works. He wrote, “. . . every one possesses an ‘idea’ about himself and the problems of life -- a life pattern, a law of movement -- that keeps fast hold of him without his understanding it . . .” Alfred Adler, *Social Interest: A Challenge to Mankind*, trans. By John Linton and Richard Vaughan, New York: Capricorn Books, 1933, 27. He also wrote, “The character traits are thus only the outer forms of the movement line of a person. As such they convey to us an understanding of his attitude toward the environment, his fellow man, the community at large, and his life problems. They are phenomena which represent means for achieving self-assertion. They are devices which join to form a method of living.” Ansbacher and Ansbacher, 219. Emphasis added.

Twenty-five years later, Sicher made specific what can be inferred from Adler’s explanations by focusing attention on the differences between the style of life and the pattern of life. For her, the pattern is an internal event and corresponds to Adler’s notion of the law of movement. The style of life is observable and represents the methods each individual uses to reach his or her goal.

アドラーは動作のパターンと法則に言及したが、個人心理学の文献には「人生のパターン」という言葉はライフスタイルとは異なる概念として登場していない。しかし、アドラーの著作の中には、この区別が推測できるものがある。誰もが自分自身と人生の問題についての「考え」を持っており、それは人生のパターンであり、運動の法則であり、本人が理解していなくてもしっかりと掴んでいるのである。…アルフレッド・アドラー『共同体感覚』。A Challenge to Mankind, trans. by John Linton and Richard Vaughan, New York: Capricorn Books, 1933, 27. また、アドラーは、「性格的特徴は、その人の動線の外側の形にすぎない。そのため、環境、仲間、コミュニティ、人生の問題に対するその人の態度を理解することができる。それは自己主張のための手段を示す現象である。それらは生き方の方法を形成するために結合する装置である」。Ansbacher and Ansbacher, 219. と強調している。

その 25 年後、ジッヒャーは、ライフスタイルと人生のパターンの違いに注目することで、アドラーの説明から推測されることを具体化した。彼女にとって、パターンは内的な出来事であり、アドラーの運動の法則の概念に対応するものである。ライフスタイルは観察可能であり、各個人が自分の目標に到達するために使用する方法を表している。

(資料 2)

「個人心理学講義 生きることの科学」 Alfred Adler 岸見一郎訳 野田俊作監訳 一光社

#### 第4章「ライフスタイル」 P.84～P.85

ライフスタイルの概念は、私たちがこれまでの章の中で論じたことと、どう結びつくでしょうか？これまでのところ、劣等器官を持った人は、困難に直面すると不安に感じるので、劣等感や劣等コンプレックスを持つ、ということを見てきました。しかし、人はこのことに長い間耐えることはできないので、既に見たように、劣等感は人を行動へと駆り立てます。そこで、人は目標を持つようになります。さて、個人心理学は長い間、この目標へ向けての一貫した動きを「ライフプラン」と呼んできました。しかし、この名称では学生が誤解することがあるので、今は「ライフスタイル」と呼んでいます。

#### (資料3)

「個人心理学講義 生きることの科学」 Alfred Adler 岸見一郎訳 野田俊作監訳 一光社  
第4章「ライフスタイル」訳注 P.86

アドラーはライフスタイル (Style of life, Lebensstil) という言葉を 1926 年から用いているが、本書で正式に導入した。それまでは、guiding image, guiding line あるいは、ここに紹介されているライフプラン (plan of life) というような語を用いてきた。意味は、以下に詳細に述べられているように、自分や世界についての見方という意味にとどまらず、目標へ向けての一貫した動き、人生の諸問題に対して創造的に対処する時の個人の独自の仕方を指している。

#### (資料4)

野田俊作の補正項「演劇的思考」 2013年4月6日

《現場》とここで言うのは、ひとつひとつのエピソードのことだ。数多くのエピソードを集めて、そこから冗長性を見いだして《地図》、すなわち理論を作る。冗長性というのは、同じパターンが繰り返されることだ。人間はそんなに賢くないので、そんなに複雑なパターンは認識できない。だから、できるだけ単純なパターンで説明しようとする。そうすると、説明しきれない部分が出てくるが、それは《誤差》として切り捨てる。それはそれでかまわないのだけれど、「理論は複雑な現場から単純な冗長性を取り出してできた地図だ」ということを忘れてはいけない。

複数のエピソードには、その人特有の冗長性があって、それをライフスタイルという。ライフスタイルは地図で、エピソードは現場だ。実際の治療では、たかだか 10 個ほどのエピソードしか扱わないが、それで冗長性はじゅうぶん見抜けると思っている。どうしてかというと、人間精神の冗長性の基本的な公式をアドラー心理学は知っているからだ。それは、「相対的マイナスから相対的プラスに向かう目標追求」というモデルで、それでもってすべての行動を説明する。これについて、科学哲学者のカール・ポパーは、「アドラーはすべての行動を劣等感とその補償で説明するが、この理論は『なんでも説明できる魔法の理論』で、反証可能性がないので、疑似科学だ」と批判している。それはそうかもしれない。しかし、さしあたってきわめて便利だ。

#### (資料5)

「個人心理学講義 生きることの科学」 Alfred Adler 岸見一郎訳 野田俊作監訳 一光社  
第1章「個人心理学の真理」 P.15

さて、精神の運動は、器官的生命の運動に似ています。どの心のうちにも現在の状態を越え

ていき、将来に対する具体的な夢を仮定することで、現在の欠陥と困難を克服しようとする目標、あるいは、理想という概念があります。この具体的な目的、あるいは目標によって、人は自分が現在の困難に打ち勝っている、と考えたり感じることができます。将来成功する、と心のうちで考えているからです。目標という観念がなければ、個人の活動はどんな意味も持たなくなるでしょう。

この目標を定め、それに具体的な形を与えることは、人生の早期、即ち、子ども時代の形成期に起こるに違いない、という事実を、あらゆる証拠は示しています。成熟したパーソナリティの一種の原型、あるいはモデルが、この時期に発達し始めるのです。

(資料 6)

4 This phrase was taken from a series of definitions that were developed by members of the Alfred Adler Society of Los Angeles. Sicher was a member of this group that worked over a period of months on clarifying these concepts. See Appendix J for the definitions.

この言葉（「ガイドラインとは、その人がプラスの価値を達成するために策定する公理、信条、原則、行動のルール（内部事象）です」）は、ロサンゼルスのアルフレッド・アドラー協会のメンバーが作成した一連の定義から引用されたものである。ジッヒャーはこのグループのメンバーであり、数カ月に渡ってこれらの概念を明確にする作業を行った。この定義については、付録 J を参照のこと。

(資料 7)

5 Adler links guiding lines to character traits: “A character trait is comparable to a guiding line which is attached to the individual as a pattern, permitting him to express his self-consistent personality in any situation without much reflection. Character traits do not correspond to innate forces and substrate; they are acquired, although very early, in order to make it possible to retain a definite pace.” Ansbacher and Ansvacher, *The Individual Psychology of Alfred Adler*, 219. Adler and Sicher at times use guiding lines to mean both the internal events, for example, principle or attitude, and the external events, for example, tools or methods that people use.

アドラーはガイドラインを性格特性に結びつけている。「性格特性とは、個人にパターンとして付けられたガイドラインに相当し、どのような状況でもあまり考えずに自己矛盾した個性を表現できるようにするものである。性格的特徴は、生まれつきの力や基板に対応するものではなく、明確なペースを維持することを可能にするために、非常に早い時期に、後天的に獲得されるものである。Ansbacher and Ansvacher, *The Individual Psychology of Alfred Adler*, 219. アドラーとジッヒャーは、ガイドラインを、例えば原則や態度などの内的な出来事と、例えば人々が使う道具や方法などの外的な出来事の両方を意味するように使うことがある。

(資料 8)

野田俊作の補正項「他流試合」 2010年11月9日

ライフスタイル分析に最初に出会ったのは、1982年にシカゴ・アドラー研究所で、ハロルド・モザク先生のデモンストレーションを見たときだ。クライアントは若い女性だったが、その人の早期家族関係や早期回想をいまでも鮮明に覚えているくらい印象的だった。先生は、「他派は、生まれた瞬間から現在までの話を何日もかけて聞いて、親のこともイヤになるほど聞いて、さらに心理テストをして、それからやっと考えはじめる。しかしアドラー心理学は、どんな小さな小片からでも推量をはじめる。それはモザイクの1片なのだから、もう1片あればその間にあるはずのものが推量できる。もう1片とは、ここにいるこの人だ。だから、最初の1片から話をはじめることができるのだ」とおっしゃった。実際に、きわめてわずかのデータを使って、またたくうちに「人生の運動の法則」を暴き出された。

(資料9)

野田俊作の補正項「冗長性とその変換」 2012年8月26日

生物の特徴は冗長性(=繰り返し、パターン)があることだと、グレゴリー・ベイトソンが言った。アドラーは、人間行動の冗長性のもっとも小さな単位は、「相対的マイナスから相対的プラスに向かったの目標追求」だと考えた。その単位が何度も何度も繰り返されることで、行動の連鎖ができていく。そのようにしてできた連鎖には冗長性があって、その冗長性のことをライフスタイルという。ライフスタイルのことを、アドラーは、「人生のパターン the pattern of life」とも呼んでいるのは、ライフスタイルとは人生の冗長性だということだ。(中略)

言葉というものは、世の中で決められた意味で単語を使い、世の中で決められた文法に従って文を作るものなので、高度の冗長性がある。冗長性があるからこそ、われわれは他人が語ることを理解することができる。すなわち、ありふれたパターンを頼りにして理解しているわけだ。そのような冗長性の高い言葉でもって相対的マイナスも相対的プラスも作られているので、ある個人の行動を見ると、きわめて冗長性の高いものになる。別の言葉で言うと単純なパターンの繰り返しになる。仮想的目標には、《競合的》な目標と《協力的》な目標という2パターンしかなくて、ほとんどすべての問題は、競合的な目標を追求することからできてくる。だから、目標が競合的であるかどうかを確かめて、それにかわる協力的な目標を探せば、問題は解決する。(もっとも、ある場合には、目標は協力的であるのに、方法としての対処行動が不十分であるために目標を達成できない場合もあって、その場合には「目標をはっきり言語化して相手に伝える」という対処行動で、たいていはこと足りる)。そうして仮想的目標を変えることでもって対処行動を変えることができれば、パターンが変わって、それ以後は類似の問題についても自力で問題を解決できるようになる。このことを「人格成長 personal growth」という。アドラー心理学のカウンセリングは、問題解決ではなくて、人格成長を目的にしている。すなわち、冗長性を変えることを目的にしている。